

枝下駅

廃線後は地元住民により駅周辺の整備が続けられているほか、碎石が枝下駅と両枝橋の区間に敷き均され、矢作川を見ながら廃線敷を歩くこともできる。



平成30年



昭和63年

今昔



平成29年



昭和42年

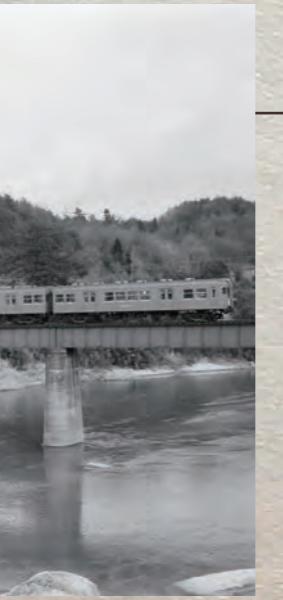
越戸駅

名鉄三河線は昭和59年(1984年)まで貨物列車を運行しており、越戸鉱山の原料の積み出しに使うトロッコ線があった。平成11年(1999年)7月には高架工事が完成し、あたりの風景は一変した。

今昔



平成15年



昭和52年

矢作川橋りょう

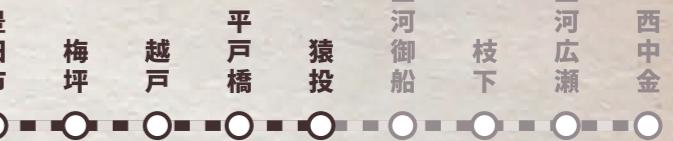
電車からレールバス、そして列車が走らなくなった平成16年(2004年)3月の廃線…。鉄橋は今でも残り、往時をしのぶことができる。



名鉄三河線の今昔

平成16年(2004年)3月に廃線

名鉄三河線 路線図



三河広瀬駅

貨物列車の積み出しに使われていた場所はマレットゴルフ場になり、週末には産直市場も開かれている。



平成30年

今昔



昭和55年



平成30年

今昔



昭和63年

猿投駅

平屋建ての駅舎は昭和初期の建築。平成25年(2013年)にはロータリーも整備され、駅前の風景は時代とともに大きく変わった。

今昔



平成30年



昭和52年

西中金駅

運行当時の姿を色濃く残す三河線終着の西中金駅では現在、週末に産直市場が開店。駅舎内では三河線の懐かしい写真も展示している。

次世代へ伝えたい 猿投のこれまでとこれから



の移り変わり、これからの猿投地区に期待したいことの3テーマで語り合ってもらった。

開催日:平成29年11月8日

会場:民芸の森「青雀居」(平戸橋町)

西加茂郡猿投町が豊田市へ編入合併したのは昭和42年。当時から現在までの50年をよく知る3氏にお集まりいただき座談会を開いた。

3氏には合併当時の思い出、その後の猿投地区



磯谷 鐘夫

Isogai Kaneo

昭和22年1月2日、亀首町生まれ。県立猿投農林高校卒業。猿投町職員として2年勤め、合併で豊田市職員となり、農業関連などの部署を歴任。平成19年3月の定年退職後は地元区長も務めた。丹精こめて作り上げた自宅の庭は「とよ花とみどりのガイドブック」にも掲載されている。



天野 弘治

Amano Hiroji

昭和14年11月12日生。中学卒業後に西尾市から青木町へ転居。県立猿投農林高校卒業、同校では生徒会長を務めた。大学卒業後、猿投町立南部中学校(現在の猿投台中)の教員となる。47年に小峯町へ転居。平成9年3月、坪台中学校の校長を最後に定年退職。三河線廃線時には区長として存続運動に尽力した。



成瀬 弘治

Naruse Kouji

昭和12年3月6日、加納町生まれ。県立猿投農林高校卒業、同校では生徒会長を務めた。大学卒業後、猿投町立南部中学校(現在の猿投台中)の教員となる。47年に小峯町へ転居。平成9年3月、坪台中学校の校長を最後に定年退職。三河線廃線時には区長として存続運動に尽力した。

このまちで過ごした日々 それぞれの思い出

司会 本日は猿投地区をよく知るお三方に集まっていただきました。偶然にも皆さん、県立猿投農林高校の卒業生という共通点もありますね。最初に自己紹介をお願いします。

天野 僕の家族は昭和28年に西尾市寺津町から青木町へ引っ越してきました。親父は西尾で農業に携わっていましたが、もっと大きな農業をやりたくて開拓地を探して移り住んだわけです。僕自身は中学校卒業まで西尾で過ごし、猿投農林高校へ入学した31年に猿投へ来ました。高校を出て5年ほどは一生懸命に農業をやりましたが、これで良いのか…という思いもあって、昼間は寝て夜に遊ぶ生活をしていた時期もありました。25歳になった頃、親父から「きちんとしたらどうだ」と言われて、雑貨店の天野屋を始めたんです。合併した42年は28歳で、その前年に結婚していました。

子どもが小学校に入つてすぐPTAの役員に引っ張られて、58年には会長を務めました。その時期は自治区の区長も務め、60年、61年には青木から越戸までの越戸連区の会長もさせていただきました。そのあと62年から24年間は市議会議員をさせていただき、ちょうど70歳で引退しました。先日78歳になつたところです。いまだに猿投農林高校の同窓会長をやつております。



成瀬さんは合併前後の11年間、カキ畑の真ん中にボツンと建つ木造の南部中学校(現在の猿投台中学校)に勤務

成瀬 僕は加納町の生まれです。親父の体が弱かつたので猿投農林高校の定時制に入りました。生徒会長をやつたのは天野さんが入学した年かな。その翌々年の生徒会長が天野さんでしたね。

大学時代は学生運動に参加していたので就職は難しいと思っていたのですが、西加茂郡の校長さんがだった南部中学校(現在の猿投台中)の校長さんが人材を探しに大学へ来たらしく、あとになつて僕は自宅へ呼ばれ「教員になる気はあるか」と聞かれたんです。僕は「その気はあるけれど、たぶん駄目で

しょう。でも私を探らないと猿投町は損をしますよ」と答えました。校長さんは、「こんな野暮を言うやつは自分の下におくしかない」と思われたのか、僕は昭和36年に教員として採用され、南部中学校に赴任したのです。南部中では11年間勤めました。

司会 話が脱線しますが、猿投町時代の中学校名を教えてもらえますか。

成瀬 猿投町立南部中学校(現在の猿投台中)、北部中学校(猿投中)、東部中学校(石野中)、西部中学校(保見中)の4校です。豊田市に合併した時、学校名が南部中から猿投台中に変わったことが不思議でしたね。なぜ「台」なのかと。

合併したとき僕は31歳でした。そのあと石野へ養子に行くことになったので、石野中学校への転勤希望を出したんです。教育長から「赴任先を指定するヒラ教員があるか?」と叱られましたが、僕としては、若いときに地元で汗を流しておかないと将来困ると思つたんです。「他の事は何でも言うことを聞くから」とお願いしたところ、どうどう教育委員会が折れて石野中学校へ赴任することができます。ここでは9年間勤めました。

磯谷 私は猿投農林高校を昭和39年に卒業後、縁あって猿投町の職員になり、猿投町が豊田市に編入合併した42年に市の職員になりました。41年の越戸ダンプ事故や、47年の豪雨災害などの悲しい思い出もあります。定年退職後は地元亀首町の区長や農業委員もさせていただきました。



青木町や井上町(写真の川の左側)では、昭和47~48年ころになると家が一気に建ち始め、まちの姿が一変
写真左:昭和46年(1971年) 写真右:平成13年(2001年)

やビリヤード場、百貨店と言つてもよいような店もありました。ガラス屋や病院もあり、活気がありましたよ。前田公園は桜の名所で、春には何十万人という観光客が来たんじゃないですかね。

司会 合併当時もまだにぎやかでしたか。

天野 そうですね。まだ名残がありましたね。

人口が急増し企業も進出 街が出来あがってきた

司会 それではテーマを変えて、合併後の猿投地区の移り変わりについてお聞きしたいと思います。

天野 それではもう人口増加ですよ。青木、井上あたりは昭和47~48年の頃に一気に家が建ち始め、50年代には人口が急上昇しました。その頃、トヨタ生協さんやハローフーズさんが進出してきました。青木小学校と猿投台中学校は建て替えをしました。すごい人口増加でした。

司会 磐谷さんは市役所の職員として、猿投地区の発展をどう見できましたか。

磐谷 工場やゴルフ場ができて、まちの姿が変わってきたました。それが雇用の創出にもなりましたよね。合併直後に荒川車体(現在のトヨタ紡織)さんが猿投へ進出してきたのは大きかったです。

天野 林テレンプさんも猿投にでき、通勤の車が増えたので道路も広がりました。そうやって街が出来あがってきましたね。

司会 中山間地の石野地域はどうでしたか。

成瀬 若者が都市部へ集中して、中山

間地には若者が住まなくなっていました。現在の山村地域の悩みである過疎・高齢化の始まりです。同時に農業離れも起き、お祭りも縮小していきました。若い衆がみんな都市部へ出てしまって、通勤圏だと思います。道路事情の問題ですか。

成瀬 いや、通勤というより、子どもの通学の問題が大きかったと思います。高校への通学です。部活動を終えて石野に帰つてくると夜8時とか9時ですかね。

地域発展の大きな マイナスになつた 名鉄二河線の廃線

司会 平成16年に名鉄三河線の猿投~西中金駅間が廃線になりました。三河御船・枝下・三河広瀬・西中金の4駅がなくなつたというインパクトは大きかったです。

成瀬 廃線当時、僕は石野の区長だったんです。御船の区長さんたちと一緒に猿投足助、旭どざいぶん回つて話し合い、1万数千人分の署名を集めて区長

司会 それでは本題に入りたいと思います。まず、豊田市へ編入合併した当時の猿投地区の思い出をお聞かせください。

天野 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当時の猿投の道路はどこも赤土で、舗装道路はどこにもなく、「こんな田舎に引っ越してきて親父は何を考えているんだ…」と思っていました。合併した42年頃も舗装道路はあまりなかつたんじゃないかな。

司会 豊田市への編入合併に対して違和感や抵抗感はありましたか。

天野 まだ20歳代の頃ですから、僕たちにはなかつたですね。

成瀬 うん、合併の違和感はなかつたですね。先見の明があるなど思っていました。

当時の猿投台中学校の周辺は、畑や空き地がたくさんありました。道路もあまり整備されていませんでした。それでも、猿投台中学校の周辺は、畑や空き地がたくさんありました。道路もあまり整備されていませんでした。

司会 僕自身は猿投町役場の最後の2年間を町職員として過ごしたわけですが、どういう気持ちで合併を迎えたか。

磯谷 私のような若い職員は「これからは街の市役所に通うんだな…。どんな人と、どんな仕事をやっていくのかな…」という気持ちでしたね。市役所に入つてみると職場ごとに良き先輩がいて、特に猿投農林高校の出身者は柴田清さん(元豊田市助役)が可愛がってくれました。冷たい目はなかつたですよ。

司会 当時の世相はどうでしたか。

天野 職替える人が多かつた時代ですね。例えば農業をやっていた人が農協へ入り、次に市役所へ、その次はトヨタ自動車へ行き、今度は関連の下請け会社へ、という感じです。

司会 磐谷さんは猿投町役場の最後の2年間を町職員として過ごしたわけですが、どういう気持ちで合併を迎えたか。

磯谷 私のようないい職員は「これからは街の市役所に通うんだな…。どんな人と、どんな仕事をやっていくのかな…」という気持ちでしたね。市役所に入つてみると職場ごとに良き先輩がいて、特に猿投農林高校の出身者は柴田清さん(元豊田市助役)が可愛がってくれました。冷たい目はなかつたですよ。

司会 当時の世相はどうでしたか。

天野 職替える人が多かつた時代ですね。例えば農業をやっていた人が農協へ入り、次に市役所へ、その次はトヨタ自動車へ行き、今度は関連の下請け会社へ、という感じです。

司会 教育は合併で変わりましたか。

成瀬 変わらなかつたですね。猿投町時代の先輩にはとても優秀な人が多くて、編入合併後も豊田市の教育長になつたり、校長会長になつたりしていました。そういう優秀な先輩がたくさんいましたから、合併後も引け目は感じませんでしたね。高校の同級生も市内各地にいて実力も分かっているから、特別な競争心はありませんでした。

司会 猿投町時代には平戸橋や勘八峠の周辺が有名な観光地だったそうですね。

天野 僕が引っ越してきました昭和31年ごろは3つのタイル工場があり、その寮に女子社員がたくさん住んでいましたね。平戸橋の近所には2軒の食堂

備されていなくて、ガタガタ道です。当時はまだ親戚や友達の家の祭りに招待される習慣がありましたが、お嫁さんが嫁いで来ると、見に来た人にお菓子が配られるということありました。家屋の建築があるともち投げもありました。どれもお披露目の習慣であり、絆づくりですよね。それが楽しみでした。それから、自動車が一家に一台あるかないかの時代でしたから、自転車や歩きの人が多くて、あちらこちらで立ち話をする人たちの姿がみられました。学校の思い出としては、南部中学校(現在の猿投台中学校)の生徒には猛者がたくさんいて、豊田市の中学校なんかに負けるかと腰にチエーンをぶら下げていたのですよ。だから教師もそのつもりで接していました。楽しい思い出ですよ。

司会 磐谷さんは猿投町役場の最後の2年間を町職員として過ごしたわけですが、どういう気持ちで合併を迎えたか。

磯谷 私のようないい職員は「これからは街の市役所に通うんだな…。どんな人と、どんな仕事をやっていくのかな…」という気持ちでしたね。市役所に入つてみると職場ごとに良き先輩がいて、特に猿投農林高校の出身者は柴田清さん(元豊田市助役)が可愛がってくれました。冷たい目はなかつたですよ。

司会 当時の世相はどうでしたか。

天野 職替える人が多かつた時代ですね。例えば農業をやっていた人が農協へ入り、次に市役所へ、その次はトヨタ自動車へ行き、今度は関連の下請け会社へ、という感じです。

司会 学校はどうでしたか。

成瀬 部活動の大会で言うと、合併前は西加茂郡内の中学校が相手でした。僕は南部中学校で女子テニスの指導をしていて、強豪は藤岡中学校でした。それが合併した途端、西加茂郡内だけではなく、豊田市内すべての中学校が相手になるわけですね。西三河大会へ行くのに相手が大勢になったなど思つたことを覚えています。

司会 教育は合併で変わりましたか。

成瀬 変わらなかつたですね。猿投町時代の先輩にはとても優秀な人が多くて、編入合併後も豊田市の教育長になつたり、校長会長になつたりしていました。そういう優秀な先輩がたくさんいましたから、合併後も引け目は感じませんでしたね。高校の同級生も市内各地にいて実力も分かっているから、特別な競争心はありませんでした。

司会 猿投町時代には平戸橋や勘八峠の周辺が有名な観光地だったそうですね。

天野 僕が引っ越してきました昭和31年ごろは3つのタイル工場があり、その寮に女子社員がたくさん住んでいましたね。平戸橋の近所には2軒の食堂

豊田市への編入合併



司会 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当時の猿投の道路はどこも赤土で、舗装道路はどこにもなく、「こんな田舎に引っ越してきて親父は何を考えているんだ…」と思っていました。合併した42年頃も舗装道路はあまりなかつたんじゃないかな。

司会 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当時の猿投の道路はどこも赤土で、舗装道路はどこにもなく、「こんな田舎に引っ越してきて親父は何を考えているんだ…」と思っていました。合併した42年頃も舗装道路はあまりなかつたんじゃないかな。

司会 それでは本題に入りたいと思います。まず、豊田市へ編入合併した当時の猿投地区の思い出をお聞かせください。

天野 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当時の猿投の道路はどこも赤土で、舗装道路はどこにもなく、「こんな田舎に引っ越してきて親父は何を考えているんだ…」と思っていました。合併した42年頃も舗装道路はあまりなかつたんじゃないかな。

司会 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当時の猿投の道路はどこも赤土で、舗装道路はどこにもなく、「こんな田舎に引っ越してきて親父は何を考えているんだ…」と思っていました。合併した42年頃も舗装道路はあまりなかつたんじゃないかな。

司会 それでは本題に入りたいと思います。まず、豊田市へ編入合併した当時の猿投地区の思い出をお聞かせください。

天野 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当時の猿投の道路はどこも赤土で、舗装道路はどこにもなく、「こんな田舎に引っ越してきて親父は何を考えているんだ…」と思っていました。合併した42年頃も舗装道路はあまりなかつたんじゃないかな。

司会 僕自身は合併した昭和42年の思い出よりも、西尾から猿投へ引っ越してきた31年当時の思い出の方が強いんですよ。当



猿投山は今も昔も変わらぬ姿でそびえる一方、荒川車体(現在のトヨタ紡織)
の進出によりまちの様子が変わった猿投地域

大勢の人来るんです。驚くほどでしょう。

司会 運動公園は駐車場が広大なので、山村地域に住む人がパーク＆ライドで電車を利用しやすくなりますね。

成瀬 今までは、あの広大なスポーツ施設が生きませんよ。県内の中・高校生、スポーツ団体が来てくれるのに、みんな猿投駅から苦労して歩いています。こんな不便なことをさせてよいのかと思いませんね。ぜひ、運動公園までは鉄道を伸ばしたいですね。あらだけ立派なスポーツ施設を作つた以上、利用者の足を確保するのは市の責任ですよ。

司会 高度成長期以降、便利な社会を追い求めてきた振り戻しで、近年、人間らしい生活を求める人も増えていますね。

大勢の人来るんです。驚くほどでしょう。

司会 運動公園まで伸ばすべきだと考えに至りました。そうすれば運動公園の価値もすごく変わります。猿投駅から一区間伸ばすには、たしか1年間で8千万円ほど市が負担しなければならないかもしれません。そのことは市議会にも説明がありました。僕たちはどちらかというと、市が負担しても伸ばしたらどうかという考え方でしたが、市長や市の幹部が検討した結果、それだけの税金を毎年つぎ込むのはいかがなものかとなり、結局、猿投が廃線になってしまったのです。

司会 猿投地区の将来にどうでも大きなマイナスでしたね。

天野 マイナスがマイナスを呼び、大きなマイナスになってしまったのではと思ってます。少子高齢化、過疎化…。まちづくりに甚大な損失を被つたと思います。これから30年、50年経つと、廃線の影響がさらに顕著に表れてくるかもしれません。

代表として名鉄の名古屋本社まで持つて死でしたよ。ところが応対に出てきたのは課長クラスの人で、実際に冷たい態度だったんです。公共交通とはいえ、慈善事業ではないんだと痛感しました。ですから廃線に関しては名鉄を責めるわけにもいきませんでした。

天野 廃線には猛烈に反対しましたが、最終的には、市の運動公園まで伸ばすべきだと考えに至りました。そこには運動公園の価値もすごく変わります。猿投駅から一区間伸ばすには、たしか1年間で8千万円ほど市が負担しなければならないかもしれません。そのことは市議会にも説明がありました。僕たちはどちらかというと、市が負担しても伸ばしたらどうかという考え方でしたが、市長や市の幹部が検討した結果、それだけの税金を毎年つぎ込むのはいかがなものかとなり、結局、猿投が廃線になってしまったのです。

司会 猿投地区の将来にどうでも大きなマイナスでしたね。

天野 マイナスがマイナスを呼び、大きなマイナスになってしまったのではと思ってます。少子高齢化、過疎化…。まちづくりに甚大な損失を被つたと思います。これから30年、50年経つと、廃線の影響がさらに顕著に表れてくるかもしれません。



代表として名鉄の名古屋本社まで持つて死でしたよ。ところが応対に出てきたのは課長クラスの人で、実際に冷たい態度だったんです。公共交通とはいえ、慈善事業ではないんだと痛感しました。ですから廃線に関しては名鉄を責めるわけにもいきませんでした。

R153豊田北バイパスに核施設「道の駅」の整備を

司会 最後のテーマとして未来の話題に移りたいと思います。これから猿投地区がどう発展すべきについてお聞かせください。

天野 豊田勘八インターと国道153号とつなぐ豊田北バイパスは平成31年までに開通する予定です。その3～4年後に国道419号までつながる頃には、四郷の土地区画整理事業が完成に近づき、人が住み始めます。近くには花市の産業団地もあります。将来は働き方も変わり、昼休みが長くなったり、夕方の仕事が早く終わったりすると思います。子どもからお年寄りまで多くの人が遊んだり、食べたりできる「道の駅」のような核施設を作つてほしいですね。猿投地区の核になりますよ。越戸・平戸橋・猿投・愛環四郷の各駅をシャトルバスが一日中まわるような形をつくれば、人々の動きも出来あがります。豊田北バイパスを上手に利用したまちづくりが大事じやないかな。

司会 猿投地区の西部はどうでしょう。

天野 西部には篠原工業団地もありますし、愛知環状鉄道の八草駅周辺には区画整理を進める

話もあります。鉢山もたくさんありますので跡地の利用も考えないといけません。むかし八草から篠原工業団地までの計画図を描いた人がいますので、それをもとにどんな街をつくっていくのか議論するといですね。八草は瀬戸と豊田の中間地点ですから重要な場所ですよ。

司会 先ほども話題になりましたが、名鉄三河線を豊田市運動公園へ延伸するという構想も将来的には実現させたいですね。

成瀬 それは、ぜひやるべきです。

天野 延伸は市がお金をかけてでも行うべきだつたと思いますし、税収も上がったと思います。運動公園にマレットゴルフ場ができただけで、あれだけ

重要な場所ですよ。

るつながりが必要ですね。いくら人口が多くても周囲の人を知らないようでは何も力が出てきません。そういう意味で言うと、この猿投地区にはしっかりと支援をもらつてほしいと思います。お金を持っていても、消防団なんて、あれほどご苦労なことはないですよ。もつと支援しないといけません。高齢者たつて田舎では大切なパワーですから、何かやれるように支援したいです。ボランティアグループにも頭が下がりますが、「ボランティアに任そう」ではない。大事にしないといけません。

一番大事なのは、次世代に何を伝え残してあげられるかだと思います。特に巨大災害への備えがいかに大切かを若い世代にしっかりと伝えたいです。市は「支援します」とか「救助します」などと安易に言わず、各家庭で7日分の水や食料を備えることを義務化した方がいいですよ。条例を作つてもいいと 思います。「市が動くのは8日目からですよ」とね。自治区も「炊き出しをやります」なんて言わない方がいい。人口1千人の自治区で炊き出しをしたら、 いつい鍋がいくついるのか…。薪もお米も大量にいりますよ。かなりの額の現金も必要ですが、そんな時に銀行は機能していません。だから炊き出ししなんて簡単には出来ません。やはり各家庭が水と食料を備えることを意識しないといけませんね。

もう一つ、自らの国や地域は自分で守るなんだといふことを、今の若者に伝えることも大事ですよ。和平交渉力かな。

司会 どう伝えて行くべきでしょうか。

成瀬 やはり、子供会、消防団といった人が集ま



座談会の会場: 民芸の森・青雀居(平戸橋町)



猿投の50年 わたしの思い出

50年の移り変わりを
市民の皆さんのお思い出写真とともに振り返ります。

四郷駅の移り変わり



豊田市民となつて半世紀。思い出深い出来事といえば、愛知環状鉄道が糸余曲折を経て昭和63年1月31日に開業したことです。

愛知環状鉄道は元々、国鉄岡多線として計画されていたもので、昭和45年に岡崎駅と北野桟塚駅間で部分開業。北野桟塚駅から新豊田駅間の線路用地は



確保できていたものの、地元では遅々として進まい工事に半ばあきらめの声も出始め、「車のまちなので、線路用地を自動車道にした方がよいのではないか」ともささやかれるようになりました。そうした中、昭和51年には北野桟塚駅から新豊田駅間が延伸開業。国鉄の分割・民営化を前にした昭和61年には、県や沿線の市が出資する第三セクターとして愛知環状鉄道が設立されました。そして昭和63年1月31日、新豊田駅と高藏寺駅間が延伸開業し、旧猿投町時代から待ち望んだ四郷駅が、我が町の田んぼの暮らしに明るい未来をもたらしたのです。

そして今、地域の課題や要望は自治区長を通して市にあげられ、安全安心につながることは優先して事業化されています。地域予算提案事業やわくわく事業のように、市民と行政が共に取り組む仕組みもでき、わたしたちも市政に参加しているという意識が持てるようになりました。このように、市民がまちのために汗を流して活動できるのは、豊田市行政のよい仕組みのおかげだと思っています。

便利で快適になつた 生活環境



猿投地区が豊田市と合併した昭和42年、わたしは社会人となつて4年目でした。当時、住んでいた西加茂郡猿投町大字寺谷下が合併により、豊田市寺下町上前田へと変わりました。あざ名が町名となつた



変わりゆく集落の 景色と変わらぬもの



ことで、ずいぶん都会的な住所になつたと感じたことを思い出します。

さて、合併してうれしかった出来事が昭和59年にありました。それは、石野地域選出の豊田市議会議員、川井鏡治さんが議長に就任されたのです。この一件で、猿投町は名実ともに豊田市になつたのだと深い感慨を覚えたものです。

合併後は生活環境も劇的に変化しました。当時は急速に車社会が進展しており、各地で道路網の整備が進みました。そして、自動車産業の発展に伴い、そこで働く人が豊田市に住むようになり、水道や浄化槽など便利で安全な生活環境が築かれました。

わたしは猿投町で生まれ育ちました。子どもの頃は



砂利道の県道深見龜首線を自転車で走り回つたり、小川で魚を捕まえたりしたことなどが思い出されます。また、小さな田んぼが多く、一反歩で5~6枚（約1,000坪の中には5~6区画）が普通でした。田んぼの形はさまざまで畦も多く、当時は手間のかかる耕作だったと思います。その田んぼは、ほ場整備で昔の面影がほとんどなくなりましたし、道は直線の多いきれいな舗装路になりました。

ただ、変わりゆく郷土にあっても、悠久の姿をとどめているところもあります。それは猿投山の遠望、そして鎮守の森である猿投神社の境内です。子どもの頃は猿投神社の境内が遊び場で、いたずらをしては宮司に叱られたことも懐かしい思い出です。その境内は

国際博覧会「愛・地球博」の期間中は、四郷駅のホームが乗客であふれ返り、大活躍しました。
現在、四郷駅の周辺は土地区画整理事業が進んでいます。数年先には700戸余の住宅地と商業施設を備えたまちが形成され、田んぼの中の駅はにぎやかになるでしょう。四郷駅のホームに上がれば、北方面に我が故郷「猿投山」が愛知環状鉄道の開業当時と同じ姿のままで見渡せます。駅周辺はにぎやかになつても、この景色だけは変わらないと思っています。

太田稔彦豊田市長は「豊田は日本の原風景を大切にするまち」と発言しており、この地も田園風景のある住みよい町であつてもよいのではないだろうかと、年齢を重ねた今、特に思う今日この頃の心境なのです。

補修されたり建替えられたりした社殿もありますが、多くは姿形をほとんど変えず、子どもの頃に遊んだ風景そのものが残っています。

目を閉じて過去50年間に思いを馳せたとき、多くのものがより便利で快適になつたことを実感します。農作業や移動手段はずい分と楽になりました。こうした進化は大切であります。しかし、心の拠り所として、どこしえに変わらぬ故郷の姿があることもまた、ありがたいことだと思うのです。

大切にしたい 猿投の歴史と伝統

語り手

猿投台地域
荒井自治区
沢井晃さん

最近、わたしは郷土史に興味を持ち、勉強するようになりました。そこで、猿投には、大変すばらしい歴史や伝統文化があることをあらためて知ったのです。わたしは花本町で生まれました。子どもの頃の遊び場といえば、近くの田んぼでした。その田んぼの中に小さな山があつたのですが、それが縄文時代の船塚遺跡だったことを知りました。さらに、荒井町の兵主神社と越戸町の灰宝神社が、平安時代の延喜式にある式内社というとても由緒ある神社であることもわかります。

わたしは花本町で生まれました。子どもの頃の遊び場といえば、近くの田んぼでした。その田んぼの中に小さな山があつたのですが、それが縄文時代の船塚遺跡だったことを知りました。さらに、荒井町の兵主神社と越戸町の灰宝神社が、平安時代の延喜式にある式内社というとても由緒ある神社であることもわかります。

いうことです。大運動会は世代間の交流を促し、区民の絆を深めます。老若男女が笑顔になれるこの機会をずっと、大切にしていきたいと思います。

嫁いだ日の風景

語り手

保見地域
田畠町自治区
永田雪江さん

さて大会の当日、各自治区の役員は早朝からテントを設営し開会を待ちます。競技は4種目あり、中でも大人は、2～3週間前から練習を始めて臨む「タガ回し」に熱が入ります。タガ回しとは、金属の輪を棒で押しながら走るという、難易度の高い競技です。途中で輪を倒してしまふと遅れるので、声援が耳に入らないほど必死の形相で手元に集中して走ります。一転して地区別対抗リレーになると、孫や地区的応援に熱が入り、順位に関係なく温かい声援を送ります。

運動会を終え、毎年思うことがあります。それは、人々の笑顔と温かい声援はいつも変わらないと想います。



荒井町一帯が昭和47年の豪雨で浸水

伊保小学校区 コミニユニティ 大運動会の思い出

語り手

保見地域
保見町自治区
加納基二さん

うになりました。2005年には国際博覧会「愛・地球博」がわたしの生まれ育ったまちのすぐ近くで開かれ、浮上式交通システム「リニモ」が開通。昔のまちの面影はまったくなくなりましたが、大学へ通う学生さんが増え、八草駅周辺はにぎやかになりました。八草の辺りを通るとき、わたしは嫁いだ日のことをよく思い出します。慌ただしい暮らしの中でも、ふとふるさとに思いを馳せれば、50年前のまちの姿が目に浮かぶのです。

語り手

嫁入り道具を積み八草を出発

猿投町から豊田市になつて1年後の昭和43年4月、わたしは結婚のため八草町から田畠町へ移り住むことになりました。写真は、嫁入り道具を積んだトラックが自宅を出発し、グリーンロード八草インターチェンジ付近の国道155号へ出ようとしているところです。

合併前後の国道155号といえば、乗用車の通行はまばらで、国鉄バスが岡崎と瀬戸の間を運行していました。それでも、国道を通る乗用車は次第に増え、わたしが嫁いだ直後に始まった猿投グリーンロードの工事や、昭和46年の大井橋の架け替えにより、車社会の到来を感じました。

こうした出来事や歴史を知る人は少なくなり、合併後に猿投地区で生まれたり転入された人が大半となりました。だからこそ、猿投の歴史や伝統の素晴らしさを多くの人に知つてもらいたい、そう願っています。

未来
な
げ

Future of Sanage



御船消防団長
うめむら ゆきひろ
梅村幸弘さん

昭和59年1月27日生まれ。生まれも育ちも御船町。県立猿投農林高校出身。豊田市消防団第4方面隊第17分団第2部(御船消防団)所属。26歳の時に第4方面隊の代表選手として県消防操法大会で準優勝を果たした。本業はトヨタ生活協同組合の職員。

2年前には豊田市消防団のPR団員に選ばれ、消防フェスタ等に来場する市民と接する経験も積んだ。本業はトヨタ生活協同組合の職員。

トヨタ自動車の食堂の責任者を任せられている。消防団活動への理解がある職場なので助かってい

るそうだ。



年末の夜警に集まつた団員たち。年代の違う仲間とわいわい
楽しみながら活動できることが消防団の魅力だ。

Key Person 01

自然豊かな
猿投地区は
災害の危険も

年間約100日活動 地域の安全を守る

船町の住民から「御船消防団長」と呼ばれ、自治区と消防団のパイプ役を務めている梅村幸弘さん。生まれも育ちも御船町だ。

婚を機に自宅の新築を決めた時、父親の知り合いから「御船にずっと住むのだから」と勧められた。奥さんも「地元の仲間が増えるから」と後押ししてくれました。団員は現在3歳

38歳の13人。わいわい楽しく活動している。

消防団員は多忙で、年間100日ほどは何らかの活動をしている。豊田市消防団の主な行事だけでも、出初め式、観閲式、消防操法大会、年末夜警等があり、消防操法大会の前には週3日の夜間練習が続く。梅村さんは26歳の時、第4方面隊（猿投地区）の代表選手として愛知県消防操法大会で準優勝を果たしている。

Key Persons of Sanage

未来を担う 猿投の仲間

猿投地区出身の仲間たちが
猿投の未来を担う次世代のキーパーソンとして
様々な分野で活躍しています。
自身の活動に対する信念、地元への想いなど
それぞれの「今と未来」をインタビューしました。





和太鼓「鼓猿」代表

ながた ちひろ
永田千尋さん

昭和44年10月14日生まれ。豊田市若林東町出身。和裁の指導員をしながら和太鼓を始めた。平成10年に和太鼓仲間と結婚して舞木町へ。25年に猿投中学校区でジュニア和太鼓チーム「鼓猿」を立ち上げ活動中。本業は和裁士と婚活コンシェルジュ。

そんな地域だ
という。和太鼓と
棒の手のコラボ
レーションも始
まったそうだ。



猿投地域を拠点に、各所の催しに招かれて演奏を披露。

Key Person 03

舞木町自治区

猿投中学校区の和太鼓チームを結成

和 太鼓の仲間と結婚して平成10年に舞木町へ嫁いできた永田千尋さん。マ友たちに望まれて25年に猿投中学校区の和太鼓チーム「鼓猿」を結成した。ご主人の

和志さんが代表を務める「三河神明太鼓」＝若林交流館が拠点のジュニアチームの位置づけだ。

演奏スタイルは盆踊りで叩くりズムを基本にアレンジし

地域に支えられ 年間20回の演奏

たもので、曲は千尋さんが自ら作っている。毎週金曜日の夜に猿投北交流館で練習し、地元のイベントや祭礼、企業イベント、福祉施設への慰問など、地域密着で年間20回ほどの演奏活動を続けている。これまで小中学生のメンバーが中心だったが、昨年から大人も加わり総勢23人で活動している。

結成には地域の人たちの協力も欠かせなかったそうだ。太鼓は高価なため豊田市わくわく事業補助金を活用し、プレゼントを重ねて数年かけて道具をそろえてきた。大きな音が響くため練習するにも地域の人たちの理解が必要だ。本番の演奏活動では、太鼓の運搬や子どもたちの移動を保護者にサポートしてもらっている。こうして地域密着の活動を続けてきたことで、今では自治区の役員さんが声をかけてくれるようになり、演奏する機会も増えてきたそうだ。

永田さんは「和太鼓の魅力はスポーツの団体競技のようにチームみんなで作り上げるところです。子どもたちが上手になっていく成長を見るのが嬉しいですね」と話してくれた。

高岡地区出身の永田さんからみて、猿投地区は自然がいっぱい、祭りや棒の手など伝統の重みがある地域だ

Key Person 02

下古屋自治区

猿投の地酒「菊石」を全国レベルの酒に



浦野酒造
杜氏

あらい やすひろ
新井康裕さん

昭和48年11月27日生まれ。岐阜県各務原市出身。山梨大学工学部化学生物工学科、同大学院を卒業。北名古屋市内の大手酒造メーカー、名古屋市内の手作りの酒造メーカーに勤めたあと、平成18年に浦野酒造へ入社。平成20年から酒蔵の最高責任者「杜氏」を務めている。

「昔ながらの酒造りも修行した若き杜氏」
「新」
井さんが来てから菊石は一段と美味しく聞く。四郷町の浦野酒造で杜氏（とうじ）酒造りの最高責任者（こうせいじやくしゃ）を務める新井康裕さんのことだ。

現代の杜氏は大学で微生物を研究してきた人が多い。新井さんもその一人だが、それだけでなく、昔ながらの封建的な杜氏集団の中に入つて修行した経験もある。教科書に載っていない酒造りの本質を学んだことは、新井さんの大きな財産になっている。

越後杜氏のもとで修行しながら「いつか自分も杜氏になりたい…」という想いが強まっていた時、タイミング良く迎えてくれたのが浦野酒造だつた。それからは良い酒を造ろうと脇目もふらず頑張り、猿投の地酒「菊石」は多くの品評会で入賞の常連になった。全国新酒鑑評会で金賞も取っている。杜氏として一流になった証だが、本人は「まだまだです」とおごらない。そういう人柄だ。

そんな新井さんだが、最近は立場を自覚し、意識が変わった部分もあるそうだ。いろいろな分野で活動しているすてきな人たちと出会う機会が増え、その生きざまに感化されたからだという。



分析室で比重(甘さ・辛さ)を調べる新井さん。
酒造りシーズンは蔵に寝泊まりすることも多い。



浦野酒造渾身の「菊石 大吟醸」。
華やかな香りと芳醇な味わいが特徴。

「ここに菊石という地酒があり、江戸時代から続いてきたのは、文化であり、技術です。それを継承していくことが僕の大好きな仕事だと思えるようになりました。この猿投から発信していきます」
新井さんは目を輝かせながら、そう話してくれた。



高町棒の手保存会
指導者
かのう まさひろ
加納正寛さん
平成4年4月2日生まれ。高町生まれの高町育ち。「高町棒の手保存会」の指導者。小学1年生で棒の手を始め、21歳のとき見当流の免許目録を伝授された。和太鼓は「高町太鼓連」所属。中学1年生の時に始め、地元の盆踊りで叩いている。本業は自動車の板金。



長男の桜彪(さくと)くんも
昨年から棒の手を始めた。見守る目が嬉しそうだ。



四郷八柱神社の棒の手警固祭り。
高町見当流のタスキは青色だ。

Key Person 05

高町自治区

高町見当流 「棒の手」を 活気づけたい

先輩からの教えを後輩へ伝えていく

四郷八柱神社の秋祭りで棒の手演技を奉納する5つの保存会の一つ、「高町棒の手保存会」で若くして副会長を務める加納正寛さん。小学1年生のとき兄2人について棒の手を始

め、中学生時代から小学生の指導もしてきた。高町ではこれまで中学生になると棒の手を辞めてしまう子どもが多く、そのため大人の演技者や指導者が少ないことが長年

の課題だった。加納さんはその少ない大人のひとりだ。中学生になつてからも棒の手を続けてもらおうと組織の立て直しに指導者となり、副会長にもなつたが行われ、保存会の雰囲気は大きく変わったという。みんなが楽しみながら練習に通えるよう工夫し、親しみを込めて名前で呼ぶようになったそうだ。

加納さんは21歳で見当流の免許目録を受けられた。名実ともに指導者となり、副会長にもなつた今、「大人の演技者を増やすためにも良い雰囲気を守っていきたい」と考えている。昨年、長男の桜彪(さくと)くんが園児ながら棒の手を始め、加納さんの思いはさらに高まっている。

棒の手の他にも、加納さんは中学生1年生のとき「高町太鼓連」に入り、地元の盆踊りで太鼓叩きを担当してきた。高町の盆踊り太鼓は伝統的に1曲を1人で叩く。練習は和氣あいあいとしながらも、踊っている人たちにしつかり聞こえるよう厳しく指導されるそうだ。

棒の手も、太鼓も、先輩たちが教えてきたもの。加納さんは「僕も同じように後輩へ伝えながら、自分自身ももっと上手になりたい」と話してくれた。

Key Person 04

下古屋自治区

地域の田んぼを預かり守っていく



有限会社はっぴー農産
代表

くろの たかよし
黒野貴義さん

昭和54年12月18日生まれ。井郷中学校から県立安城農林高校、東京農業大学食料環境経済学科へ進学。卒業後、石川県の農業法人で1年修行して、24歳の時に家業の有限会社はっぴー農産を継いだ。夢農人とよたの副会長。下古屋棒の手保存会所属。

黒野さんは子どもの頃から両親が楽しそうに農業をする姿や、直売所でお客さんから「ありがとうございます」と言われる姿を見て育ち、高校時代には農家になるようと決めていたそうだ。

「これから農家は生産だけでなく販売にも力を入れなければ」と、大学は東京農業大学の食料環境経済学科を専攻。卒業後は加工品販売やマーケティングに力を入れる石川県の農業法人で1年間修行してきた。

はっぴー農産では農薬や化学肥料を抑えるため土づくりにこだわる。こうして作った安全安心な米を買い求めるお客様は人口急増の浄水町や乙部ヶ丘に多く、今後、四郷町の区画整理事業で住宅が増えるとさらに需要は高まりそうだ。黒野さんはこれを機に「地域の食料自給率を上げたい」とも考えている。

稻作をやめる農家が増えている今、地域の田んぼを預かり守っていく役割もはっぴー農

産地区で米や桃の栽培、農作業の請け負いなどを広く展開している四郷町の「有限会社はっぴー農産」。スタッフ、お客様、地域がみんな幸せになる「3者はっぴー」を経営理念に掲げる農業法人だ。代表の黒野貴義さんは農業の未来と向き合う若手プロ農家集団「夢農人とよた」の副会長も務めている。

黒野さんは仕事以外にも、下古屋棒の手保存会で地域の伝統文化の継承に取り組んでいる。得意の演技は二刀流。棒の手をさらに発展させていくため頑張る覚悟だ。



猿投地区の中では大きな農家。
大型機械も活躍の場が多い。



棒の手は小学3年生で始めた。
得意な演技は二刀流だ。

社員、お客さん、地域の 3者をハッピーに

は25ヘクタールだったが、今ではその3倍になった。現状で手一杯なため依頼があつても断らざるを得ないのが悔しいそうだ。

黒野さんは仕事以外にも、下古屋棒の手保存会で地域の伝統文化の継承に取り組んでいる。得意の演技は二刀流。棒の手をさらに発展させていくため頑張る覚悟だ。